

静岡県エネルギー戦略推進会議令和7年度第3回会議
議事録

1 開会

●齊藤経済産業部長挨拶)

2 議事

エネルギー戦略案について

●新居課長)

・資料に基づき説明。

○柏木会長)

・今日は最終案並びに今後の進め方、あるいはエネルギー戦略を踏まえて今後求められる県としての独自性も踏まえたこれからの取り組みなどについて、御意見いただきたい。

○井上委員)

- ・今回作成いただいた戦略案、GXによる産業振興、再エネ、省エネの推進、この三つについてセットで考えられる仕組みが、大変整理されて作られており、今後の道筋がよくわかりやすいと感じた。
- ・また、省エネの診断の部分は、普及啓発だけではなく、省エネ診断を支える人材育成まで踏み込んでいる点も今後戦略を進める上で心強い。
- ・今後この戦略を進めるに当たって、2点ほど検討いただきたいことがある。
- ・1点目は熱需要の扱いをわかりやすくしていただいた方がいいということ。
- ・省エネ診断で工場、事務所を回っていくと、やはり電気以外の熱のウェイトもかなり大きなところもあり、診断の中で、断熱や廃熱回収の運用改善を進めた上で、例えば低温についてはヒートポンプを進めるとか、中高温についてはプロセス改善や、重油からLNGへの燃料転換、こういったものも含めて、温度帯別で指導できるようなことを、実際の事業推進に当たっては進めていただければと感じた。
- ・2点目は、省エネ診断においては、法が変わって、再エネの提案も省エネ診断の中でするようになってきているので、診断員の提案を受けるのは大変いいことだと思っている。ただ、省エネ診断やった後、中小企業の方になると、資金繰りの関係でなかなか進んでいないというのが正直に感じているところ。
- ・診断から計画、資金の調達、実際の設備更新、その後の効果検証まで、一環と

して繋いでいくことが大変重要かと考えている。

- ・記載の通り金融機関等の連携も強めながら、設備更新、運用改善等の支援を、実施の際にはぜひ進めていただきたい。

○柏木会長)

- ・熱需要は最終エネルギー消費量の6割を占める。電力が4割、熱が6割、これのゼロエミ化に関しては、廃熱利用等含めて、どう考えているかについて、回答があれば伺いたい。

●新居課長)

- ・熱利用も非常に重要な観点であり、我々としては、電気と熱トータルでエネルギー利用の高度化、効率化の中で、複合的に取り組まなければいけないと考えている。
- ・そういった意味で、来年度以降、今後、県議会において予算審議がなされる部分ではあるが、今まで県でも支援を行ってきた省エネ設備の更新から、一步進んだ先進的なエネルギーの高度利用等の取り組みに対して財政的な支援ができればと考えているところである。
- ・こうしたところは、委員の皆様方の意見を踏まえながら現場に落とし込んで、しっかり対応していきたい。

○勝呂委員)

- ・全体としてはこれまでの意見が反映されているので、全体的な違和感はない。
- ・戦略の本体の32ページで、私がガス会社の立場として前回申し上げた、バイオガス利用を入れていただいたのは大変ありがたい。
- ・発電利用だけではなく、先ほど熱のところ、都市ガスのカーボンニュートラルの有効な手段として、例えば下水汚泥の利用等に向けて、我々としても各市町と連携して、活用に取り組んでいきたいと考えている。
- ・また、42ページのところで、2040年を見据えた方向性を今回まとめているが、更なる再エネの導入拡大のところに、国の示す再エネ4から5割に向けて、県として応分の役割を果たすと記載がある。
- ・当社も再エネ電源の開発は、太陽光を始めとして推進しており、営農型太陽光の実績もある。
- ・当然地域との共生を大前提として事業を推進していくが、地域の合意形成や理解促進に向けて県からの具体的な支援があれば、再エネ導入がさらに進むことから、この点お願いしたい。

○柏木会長)

- ・県として、特区構想などで規約、規制を変えていくとか、なかなか民間事業だけではできないものもある。
- ・地域との共生に関して何かあるか。

●新居課長)

- ・再エネについて世の中を巡る状況は今非常に厳しいところがある。
- ・日本全国、メガソーラーに代表される開発に対する嫌悪感といった住民感情もあり、なかなか合意が得られないことがあるとは感じている。
- ・感情論で語られてる部分があると思うので、県の役割としては、そもそもエネルギーとしての再エネの必要性をしっかりと住民の方に説明していくことを、まずしっかりとやるべきだと思う。
- ・そういった中で理解が進んでくれば、今のような再エネイコール悪といった拒絶反応も徐々に無くなっていくのではないかと考えており、そこはしっかりやっていきたい。
- ・もう一つは、再エネが単なるエネルギーの拡大ではなく、地域の課題解決とセットに行われれば、それは地域にとっても裨益が生ずるということで受け入れられると思われるので、これまで県で行ってきた再エネ導入拡大の支援についても、地域の課題を解決するものに対して重点的に支援していくような仕組み作りもしていきたい。

○柏木会長)

- ・静岡は非常に自然エネルギーに恵まれている地域であるから、政治的に再生可能エネルギーを導入していくことはいいのだが、系統に対してもコントロールできるような形で、うまく旧一般電気事業者のネットワークとも協働しながら考えていくことが重要である。

○寺田委員)

- ・大企業はだいぶ意識が高くなっていると思うが、中小中堅の企業と接している金融機関としての立場で申し上げるが、GX産業振興と再エネ、省エネとそれぞれ書いてあるが、やはりこのGXとか再エネというと、まだまだハードルが高く、まずは省エネからやっていこうという意識は少しずつ出てきている。
- ・銀行でも、脱炭素に関するヒアリング、アンケートを年1回行っており、この回答を見ると、省エネに関する設備投資をやっているという方の比率がだんだん増えてきており、意識が少しずつ高まっていることがわかる。
- ・ただ、省エネをやりたいのだけれども、資金の問題と人の問題が意見として出

てきている。

- やはりまずは地域の中小企業、中堅企業からすると、省エネから始めるというのが第1のきっかけだと思っており、金融機関としても、いきなりGXと言っても混乱するので、まず省エネからやっていきたいと思いますということを現場でも申し上げている。
- 私どもからすると、それが資金調達に繋がって金融支援をするという意味では、それは本業のところでもある。県とか市町で、予算どりをしていただければ、金融機関としても推進しやすくなるし、ファイナンス側もそれに伴った商品も作りやすくなるため、そこはまずお願いしたい。
- 今トランプ政権になってカーボンニュートラルの流れは逆行していると世の中言うが、そうは言いながら、意識の高い方もいて、これから本当に脱炭素は大事なんだと力説していた経営者もいた。
- であるから、これが少しずつそういった経営者が増えていただくことが静岡県がエネルギー先進県になることだと思う。
- 私は、静岡県のいいところに、周りの方と歩調を合わせていく県民性があると思っており、隣の会社さんがやっているとうちもやらなければ、と考える方が多い。
- なので少しずつ仲間が増えてくることで、意識が変わってくると思っている。
- これからの具体的に進めていくにあたって、KPI的なところをやっていた方がいいと思う。
- 例えば、県内自治体でいくつ再エネを導入していくというのを、何か数値を掲げるなどして、結果はどのようであってもいいので、KPIがあることで、それを上回るにしる、下回るにしる、原因があり、経過を意識して動くことになり、より具体的に進めることができるのではないかな。

○柏木会長)

- 省エネは即効性がある。
- 今、コストプッシュ型のインフレと言われている中、省エネの回収年数を考えると、国内のサプライチェーンがしっかりしてれば、今後導入が増える可能性があるということであるから、金融が非常に重要になってくる。

○鳴松委員)

- まず国の第7次エネルギー基本計画を基にしっかりと、静岡県に落とし込むとともに、各委員の意見がまとめであると思う。
- 私は事業者の立場で、当初から、静岡県においてGX先進県と銘打つためには、中小企業の方々をどれだけ取り込んでいくかが大事だと申ししていたので、今、

寺田委員が発言されたことは、我々が事業者の立場からすごく感じているところである。

- ・意識が高い企業においてはすごく進めてるし、実質的な数字をカバーしていくという意味では、そういう方々がしっかりやっていけばいいのかと思うが、中小企業まで広げていくことが、GXを本当に推進していく、より活発にしていこうという意味で大事だと思っている。
- ・我々もGX、カーボンニュートラルという文言を一番最初は押し出していくのだが、やはり省エネイコール省コストであるから、優先順位としては、いかに省エネによりコスト削減につながって、ひいては環境にいいのかというところであったり、それが実際経済を回す一番大事なことだということ、ここを中小企業の方々に知っていただくということが、すごく大事だと思って、目下、営業しているというところ。
- ・井上委員、寺田委員の御発言と、立場が違うだけで発言内容は変わらないのだが、中小企業にどう意識付けするかがポイントと思っている。
- ・必ず効果は現れるので、そこの告知活動というものを、しっかりと私どももやっていくし、行政にもそこを御協力いただければと思っている。
- ・KPIについて、前回数値化を求める発言をしたところ、しっかり目標値が記載されていることはありがたいのだが、もう一歩踏み込むとさらに良くなるのではないかな。
- ・省エネ診断の件数ではなく、それによって何が生まれてきたところまでやると、よりKPIに近くなるのではないかな。
- ・また、私どもの事業でも、スタートアップ企業と連携をして、新しいサービスを既存の顧客に提供するということがあるので、スタートアップ企業の技術を活用した新たなサービス提供についての件数などがあると、さらにGXの推進が図れるのではないかな、優先順位が高いことではないかなと思う。

○柏木会長)

- ・省エネの診断による効果はどのくらい出るのかもわかると、非常に中小企業もやる気になるのではないかな。
- ・省エネは企業として即効性があるから、すごく重要なんじゃないかなと思った。

○三須委員)

- ・今回の資料は非常にわかりやすくなっているので、内容そのものについての発言はない。
- ・せっかく良い戦略ができて、中身を見ると、重点取組が明示されているので、これを予算化も含めて確実に進めていくことが重要と思う。

- また、今回、災害時のレジリエンスという言葉が大きく強調をされており、これは大変いいと思っているのだが、災害レジリエンスと考えると、都道府県の役割も重要なのだが、市町村、基礎自治体の取り組みと役割が非常に重要だと思う。
- 基本的には災害の話は、県も市町村も防災セクションのウェイトが高いと思うが、こういった県のエネルギー戦略ができて、レジリエンスの部分も触れられていることを市町村に伝えていくということが、非常に重要だと思う。
- 今回の重点取組の中にあるマイクログリッドやコジェネを実際に進めていくに当たり、工業団地や、小規模自治体のエリアでも確実に取り組んでいくことが、レジリエンスの観点から非常に重要だと思う。
- まず先行して大きな市で取り組みが進みつつあるが、こういったものを、小規模自治体にもしっかり認知してもらって、県内各地でマイクログリッド等の取り組みが進んでいくことを県がやっていくことは非常に重要な仕事だと思う。
- この戦略を、どう地域に落とし込んでいくかという観点で進めていけば、結果として県内各地で取組が広がり、各地域での再エネ導入量増にも繋がっていき、結果としてそれがGX産業の広がりにも繋がっていくようにも思う。

○柏木会長)

- 強靱化は、系統に頼ってるのはもちろんいいのだが、ただ自然エネルギーで何があってもこの地域だけは、例えば公共の建物を言うなればそこをマイクログリッド化して、あと、停電時にそこだけ分離する。そのためにこの中に電源がないとうまくいかないのでは、それは自然エネルギーでありコジェネであり蓄電池であると。
- 今度は需給調整市場もできてくるから、余剰のところをどんどん上位系にこの変動成分が入ってきたときに、需給調整市場で低圧をアグリゲーターが高圧にして売れることになるから、今後の動向としては、この電力の制度改革、これのスピードに合わせた形で考えていくことはすごく重要である。
- そのためには系統とか、静岡の中で系統を誰がどう入れていくかというのは、SPCを作ってやっていくのか、あるいはガス会社と電力会社と組んでやっていると、いろんな系統があると思うが、そこまで戦略に書き込むのはなかなか厳しいので、市場との連携というのが非常に重要だと思う。
- その点もコメントとして伺った上で、それをいつも頭に入れながら、この強靱化というのを考えていただくと、静岡が最初にやったということになるので、非常に重要ではないかと思っている。

○望月委員)

- ・全体の戦略については、今まで自分が発言した内容が盛り込まれている。
- ・特に戦略の柱立て、29 ページで、前提として、電力需要は絶対増えるということに基づいてこの戦略を作っているということを盛り込んでいただいた。
- ・それから再生可能エネルギーの導入のところで、現在の送配電システムが老朽更新のタイミングとなっている。
- ・コストも含めると、再生可能エネルギーを作るときに老朽更新を踏まえて普及するという事も十分考えておかないといけない。戦略に盛り込まないにしても、そういうことを考えた進め方が必要と思う。
- ・それから、出力制御の問題で、先ほど柏木会長が言われた間欠供給というところを、いろんな意見があるが、データセンターを学習と推論に分けて、学習のところだけ田舎に作る、推論を街に作るというやり方で、一番電力を食う学習のところに、出力制御の余った電力を上手に振り分ける、そうすると電力を運ばないでデータを運べばよくなる、といったワットビットをイメージしてこれを提案させていただく。
- ・それから最後に原子力の問題については、書かなくてもいいと思うが、西部地域は今回の御前崎の話はすごく大きい。
- ・将来の電力が安くないということも含めて、県の方をお願いなのだが、この後どんな影響があるのかを、ぜひ調べておいていただきたい。
- ・県議会の委員会やパブリックコメントで、意見が出てくるかもしれないので、準備をしていただければと考える。

○柏木会長)

- ・原子力が動くことによってどういう影響が出てくるのか、補強しなければいけないかもしれない。
- ・それを踏まえて、絶対的なものではないが、第三者的にいくつかのシナリオを示していく、そういうことをある程度考えておいて、今は静かに見守るのが一番フェアな考え方だと思う。

○中井委員)

- ・概要版の第5章の具体的取組の表で、「GXによる産業振興」の「各柱の重点取組」の全ての箱の中に水素という言葉が散りばめられており、私は、静岡県創エネ・蓄エネ技術開発推進協議会の水素部会の部会長として、やることがたくさんあるということを感じてるところ。
- ・こういう中で、県独自の水素需要の拡大というところで、水素専門のコーディネーターを備えて、彼と色々と協議しながら、これからの水素事業というもの

を拡大していくような計画を作っていきたいとは思っている。

- ただ、その前に、やはりせっかく経済産業部がエネルギー戦略を作るということでもあるので、県内の産業構造がこれからどうなるのかということの指針があると、その中のどこで水素が使えるかということが出てくるので、県内の産業構造がこれからどう動いていくのかということ、データセンターのみならず、製造業のあり方が変わっていくところもあるだろうから、そこを、水素部会と一緒に県の方と考えていくということもあるのではないかと思う。
- 次に、水素の具体的な技術開発を進めながら、それを実装させていく場面になると、やはり資金が必要になるので、ぜひここは補助金から出していただきたい。
- 今、一般的によく言われてる言葉で、インパクト投資というのがある。ここは寺田委員が十分お詳しいところではあるが、従来のリスクリターン考え方、要は財務リターンのみならず、社会的リターンをどういうふうに取り込むのかということだと思っている。
- 金融庁が出している SSBJ（サステナビリティ基準）をこれから基準として、プライム市場から順番に自社のその自然資本との関係性というものを開示していかなければならないということになったときに、水素というものをどういうふうに位置づけて、自社の中での水素活用をストーリー立てて考えられることだと思うので、こういうインパクト投資のような考え方というのを、市場の中に徐々に入れていかなければならないと思う。
- 最後に、水素のみならずアンモニアについても記載いただいたが、やはり水素と並んでアンモニアも重要なエネルギー源だと思うので、こちらも水素部会の中で取り込んでいきたい。

○柏木会長)

- 水素自体は、先ほど熱需要の話も出た。
- 熱需要と水素、あとは再生可能エネルギーの変動成分の活用など、色々な意味で二次エネルギーの良さがある。
- 製造メーカーへの電力供給用のメガソーラーもあるだろうが、その余剰電力の調整に水素を活用するなど、県として水素をどうやって進めるのか、特区構想やこれから整備されるであろう水素関連の事業法などを踏まえ、県も考えなければいけなくなると思っており、非常に重要なところであるので、これを頭に入れておいて、今後の方針を進めていくというのが良いのではないか。

○竹内委員)

- 総合的な感触としては、大変バランスも取れているということ、そしてまた、

県の特徴である製造業が非常に充実している地域であるというところと、その部分の熱需要をどういうふうに捉えていくかといったような、その地域性も含めてよく考えられたものになっていると思う。

- ・現在の状況を含めて、気をつけるべきポイント、気をつけていただくとより良いというポイントについて申し上げる。
- ・水素だが、国際的にみると、水素のコスト高をどう吸収するのかというところが課題になってきている。
- ・このようなところで、支援を受けてもう走り出していたプロジェクトは進んでいるところもあるが、民間企業などは、例えばBPなどは、もう水素部門も解体することを判断しているところなので、どこまで支援をするのかといったバランスは、非常に問われるだろうと思う。
- ・今は、インフレ時期というところがあるので、社会実装を進めるというところではなく、開発や体制作りといったところが重要であると思うので、そのバランスについて御配慮をお願いできればというのが一点である。
- ・もう一点は、政府の政策、国全体としての政策というところを相当意識しているのだが、一番意識していただきたいのが、GXという文脈で、GX産業立地というところが政府としても一番主要なところである。
- ・今までの石油が輸入されて、荷揚げされるところがポイントになって起点になって、そこにコンビナートができて、そこから産業が集積をして徐々に広がっていくという、こういうような形になっていて、どういったところにエネルギーが、それを活用していく産業が立地するのであろうかというところを政府が今、公募をかけているところでもあるので、ぜひそういったところと連携をしていただきたい。
- ・改めて今、とても重要なタイミングだというところをちょっと強調させていただきたいと思う。
- ・3点目が、自治体同士の連携があってもいいのではないかと思っている。
- ・私は、東京都のこうしたエネルギー問題の委員会の委員をしているが、東京都も、福島でできた水素を持ってきて活用するところにサポートを出していたり、色々な取組みをやっていた。
- ・静岡での取組みと東京都の取組みについて、何か連携できるところはないか、自治体同士の連携というようなところも、あってもいいのではないかと感じた。

○柏木会長)

- ・水素は市場は確実に増えている、ただ、投機筋が少し厳しいかと。
- ・投資はきちっと増えているので、金融機関とエネルギー事業者と連携をしながら

ら、静岡は自然エネルギーが多いということになると、二次エネルギーの水素をどうするかというのを避けては通れないので、考え方を整理すべき。

- 水素が高いというのは、例えば、ルイジアナ州における低炭素アンモニアの製造プロジェクト「Blue Point」で、アンモニアを製造しているが、あれもずいぶん高い。
- アメリカから持ってきても高いのだから、なかなか国内では難しい。
- その辺のことをきちっと整理しながら進めていくことが重要ではないかというのには私も同感である。
- あと、自治体同士の連携であるが、山梨と組むとか、例えば米倉山なんかは、既に連携している部分もあるのではないか。

●新居課長)

- 水素に関しては、山梨県は色々な意味で先進県であるので、本県が水素に取り組んだ当初から連携している。
- 実際に、山梨で作っている水素を活用するところまではまだっていないが、実際に山梨の企業と静岡で水素関係をやっている企業とのマッチングや、山梨で行っている人材養成講座などがあるので、そこに本県の水素部会の会員の方が参加していただくといった形で、連携をし始めているところである。
- すぐ近くに水素に関して取り組んでる県があるため、今後もこの連携等を積極的にやっていきたいと考えている。

○柏木会長)

- 県庁同士で連携し、それでその下の市町村までうまく下ろしていければ、本格的なプロジェクトになる可能性、確率が高くなると思う。

○齋藤副会長)

- まず全体を見て、再エネに対する逆風が強いし、さらに世界中が大混乱している。そういう中で、下手をすると、過敏、過剰に反応したり、あるいは鈍感になったりするっていうのが常なのだが、非常に冷静によく頑張ってもらえた内容だというふうに思う。
- その上で、細かいところであるが、指摘がある。
- 戦略の 20 ページであるが、西部地域が一番多くて、伊豆地域が一番少ない。このデータを見ると、西部地域が進んでいるように思える。
- ただ、データというのは見方であり、この見方を変えて、例えば、その地域で消費している電力との比で見るとどうなるかというか、そういうようないろんな見方をするのも必要じゃないのかなというふうに思う。

- なぜそういうことを申したかと言うと、再エネに関しても、どうしてもメガソーラー、これに反対することは正義なんだということを振り回すような場面もある。
- しかし、再エネ自体、太陽光にしても風力にしても、それ自体は悪いものではない。やはり我々はうまく利用していかなければならないものなのではないか。
- データ一つを取ってもそうだし、説明の仕方によってもそうだし、常に客観的に見れるようなものが必要だと思う。さらに踏み込んで、いろんなデータを見るところも必要になってくると思う。
- それから、私は1日、朝昼晩で10数キロ、歩くのだが、私の自宅の近く、5キロ四方を歩くと、ソーラーパネルを設置できそうな場所がある。森林を伐採しなくても、まだまだ探せばたくさんあるのではないか、消費するところの近くにあるのではないか、という思いがある。
- 自分の足で歩いてみて、Googleマップ上でもいいのだが、調べていくと、その地域にあるいろんなものを感じる。その地域の匂いもあるし、それからその地域の全体の雰囲気もあるし、各家庭の雰囲気なんかもある。そういうものを十分に汲み取った上で、進めていくというのが必要なんじゃないかと。
- それがわかれば、日本の場合には、イデオロギー的に再エネに反対するわけではないし、さっき新居課長からもあったように、多分ほとんど多くが感性、感情的な反対なのではないか。
- それともう一つは、本当にこれ経済的なんだろうかという部分もあるのではないかと思う。そういうのは、やはり肌で感じることも非常に大事ではないかと思う。
- それこそ、まさしく自治体として、どういうふうに県民の意見を吸い取り、あるいは他の自治体と連携していく点で、重要になってくるのではないかと思う。
- もう一つ、先ほど省エネでも認知の向上というのがあった。
- 連携する上でもやはり認知というのが非常に重要になってくると思うのだが、省エネにしる、再エネの導入にしる、それが見えるようにするためには、これだけのメリットがある、これだけのデメリットもあるということをどこかでしっかりと示す必要があるのではないか。そのためには、例えばモデル地区、トヨタのWoven Cityというのがあるが、あんなことはできないか。
- そのメリット、デメリットが、はっきりわかる形で示されれば、省エネにしる、再エネの利用にしる、それから水素にしる、広がっていくことが、より鮮明になるのではないかと思う。

柏木会長)

- これを出して、県民の方々が、どういうふうに捉えて、どういうアクションを自分たちのものとして取っていくか、他の人がやるんだと思って、企業がやるとか、もちろんそういう主体的にやる人たちが、いろんな企業もあれば金融とか、産官学のいろんな立場があると思うのだが、やっぱり県が出すわけだから、県民がどういうふうに自分のもとに捉えられるかという内容にしていくということが重要だと思う。
- 戦略を読むと、重点項目が書いてあるのだが、重点が書いてあるからわかりやすい、全部読むのは大変だから、そこだけ読んでくれてもいい。
- なるべくぱっと見て、あるいは図にするとか、視覚に訴えるようなことをやっていけば、県民の方々の理解も得られる。
- そう思うと図、絵で、ビジュアルに、小学生中学生も、もっと若年層にも見てもらえるような物にするとよいのではないか。
- この戦略を、誰でもわかるような、要するに小学校中学校から、老若男女全ての方々にわかりやすい報告書にしていくっていうことを齋藤副会長はおっしゃられたと私は理解した。
- これから行うパブリックコメントについても、いただいた県民の意見を大事にして、入れていくようにするのがいいのではないか。

●新居課長)

- パブリックコメントでいただいた意見をどういった形で反映するかについては、また考えて、会長とも相談していきたい。
- それとは別に、エネルギー政策をどれだけ県民の方にしっかり理解していただくかということも重要であるので、この形で一旦戦略としては進めていくが、来年度以降は、広報ということで、これをどう県民の方に知らしめていくかというのがあると思うので、県民だよりを活用するとともに、要旨を抜粋して1枚にまとめ、それをホームページにはるといった工夫をしながら、県民の方にわかりやすく理解していただくというのも、来年度進めていけたらと思う。

○柏木会長)

- 委員の方々に集まっていたいただいて意見をいただいていたのだから、何らかのインパクトがあるようにすることが重要だと思っている。
- 皆様のお考えをもう一度最終的に検討さしていただいて、事務局と少し相談をさしていただいて、パブコメにかける、パブコメにかけるのいつか。

●新居課長)

- ・パブリックコメントは、資料の4に予定表を載せたが、明日からということになっている。
- ・ここでいただいた御意見を含めて、会長と御相談をさせていただく。

○柏会長木)

- ・事務局と最終的に私とあの今日中か明日の朝ぐらいまでに、検討さしていただいて、パブリックコメントにかけていきたい。
- ・これで、議題が全て終わったことになる。いろいろとありがとうございました。
- ・今後ともよろしく願いたいと思います。

●新居課長)

- ・最後に事務局を代表いたしまして柏木会長、斎藤副会長および委員の皆様にお礼を申し上げたいと思います。
- ・今年の年度初めから、我々の方で作成した素案をあげさせてもらいました。
- ・たくさんの御意見をいただき、最初の素案に皆様の御意見を反映させていただく中で、相当ブラッシュアップされた戦略案へと生まれ変わることができたと思っています。
- ・本当に感謝申し上げます。
- ・戦略は今後パブリックコメントを経て、公表という形になるわけですが、本当に重要なのは、戦略に基づいて実効性のある政策を実行していくというところだと思っています。
- ・また先ほど今後の進め方ということで、また今後も、委員の皆様にご意見をいただきながら、県としてエネルギー政策を進めていきたいと考えておりますので、来年度以降も引き続き、御指導御鞭撻をいただければと思いますので、よろしく願い致します。
- ・本当にありがとうございました。

3 開会

○梅澤)

- ・以上をもちまして会議を終了します。本日は誠にありがとうございました。